



TITLE:

<学生の声> 慣れても馴れるな

AUTHOR(S):

玉山, 泰宏

CITATION:

玉山, 泰宏. <学生の声> 慣れても馴れるな. Cue 2010, 23: 63-63

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/108662>

RIGHT:

学生の声

「慣れても馴れるな」

工学研究科 電子工学専攻 北野研究室 博士後期課程2年 玉 山 泰 宏

私が普段意識していることの一つに「慣れても馴れるな」ということがあります。しばしば聞く言葉かもしれませんが、この言葉について考えてみたいと思います。

まず、単語そのものの意味について調べてみました。旺文社の国語辞典（第八版）に拠りますと、「慣れる」には熟練するという意味があり、「馴れる」には珍しくなくなるという意味があるとのこと。これを基に「慣れる」や「馴れる」が何を表しているのかを考えることにします。料理が上手になる、楽器の演奏が上達するなどは「慣れる」で表されるでしょう。このような意味であれば色々なことに「慣れて」おいた方が良いような気がします。では、「馴れる」はどうでしょうか？少し強引かもしれませんが、その人の言動が珍しくなくなると考えれば、環境に同化する、周りの色に染まることを表すと解釈することができるのではないのでしょうか？つまり、周りの人と同じような考え方をもったり、周りに合わせた行動をとったりする状態であると考えられると思います。これは反対意見が衝突したりすることが少なく、何か決断しなければならないときもなんとなく周りに流されて決めることができるので、居心地の良い楽な状況であるとも見ることができます。この「馴れた」状態を良いと思うか悪いと思うかは人によって違ってくるとは思いますが、私は良くないと考えています。「馴れて」しまうと、自分と他人の差が少なくなってしまうので、自分の代わりはたくさんいるということにつながってしまいます。自分自身の存在価値を重要視する場合は「馴れて」しまうのはだめであるといえるでしょう。

まとめると、楽であることが大事であるのならば「慣れて馴れる」で良いのかもしれないですが、自分の存在意義を高めたいのであれば「慣れても馴れるな」でないといけないということになると思います。「馴れる」のは良くなさそうだった方は、一度自分が「馴れて」しまっていないかどうか考えてみてはいかがでしょうか？

「博士後期課程学生2年になった私が思うこと」

工学研究科 電気工学専攻 引原研究室 博士後期課程2年 横 井 裕 一

博士後期課程に進学して約2年が経ちました。指導教員である引原教授のおかげで、様々な経験を積ませていただいております。3年前に就職か進学か悩みましたが、今は進学してよかったなあと感じております。博士後期課程学生として2年間過ごして来た今になって、見えてきたことがいくつかあります。この学生の声では、その中の2つについて書きたいと思います。

1つ目は「研究指導」です。私は研究の1テーマを学士4年の学生と遂行しています。彼は研究を行ったことがないので、研究とは何か、どのように進めて行けば良いのかなど、私の独断と偏見で、時にはこちらが教わりながら、指導しています。現在2人で行っている古典力学の勉強会で、彼が理解できた目を輝かせているのを見て、私も充実感を得ています。教科書をありのまま受け入れそれを覚えるという受験勉強法から脱却できたことが彼にとって大きいと思います。このような先輩から後輩への指導は、私が研究室に配属された当初からありました。しかし、最近では学生間で深く指導するということが失われているように感じます。引原研究室は各学生で研究テーマが大きく異なることもあり、学生間の自発的な指導と議論が不可欠です。自分の研究を後回しにしても後輩を親身になって助けることが互いの研究テーマを深く理解し、また自分の知識を広げることにも繋がると思います。正に「情けは人のためならず」(?)です。教育もまた同じなのかもしれません。

2つ目は「研究環境」です。私は平成20年の冬に3ヶ月間、イギリスのアバディーン大学に研究滞在する機会を頂きました。その主な理由は受け入れ機関に実験設備が充実しているからでしたが、実状は全く違いました。実験装置は分解され、必要な測定装置はないという環境で、かなり工夫を要しました。また誰も助けてはくれませんでした。このような経験を通して、私がいる引原研究室の研究環境が如何に素晴らしいかに改めて気付くことができました。この研究環境が当たり前ではないということを常に念頭に置きながら、残りわずか(?)になった学生としての研究生活を堪能したいと思っています。